

第3版の序

第2版の改訂から7年、初版からは14年が経過した。

医学の進歩は著しく、特に遺伝子の基本構造であるDNA解析は長足の進歩を遂げている。本書の初版が発行された前年にヒトの全ゲノム配列が明らかになったと発表されたが、実際には解析できていない部分が残っていた。当時のDNAの塩基配列を解読する機器であった第一世代シーケンサーでは解析に年単位での時間を要したが、新しい分析方法を用いた次世代シーケンサーといわれる機器はわずか数日で解析ができ、2022年4月にヒトの全ゲノム配列が完全に明らかになった。

この新しい技術は、疾患の診断に徐々に活用されるようになってきた。日本病理学会でも疾患診断のために、この技術で取得されたデータを取り扱う専門医として、2021年より分子病理専門医認定を開始した。

疾患は多種多様だが、どれも臓器の形態に変化をきたすものである。日本人の死因の第1位である悪性新生物、がんはその典型例である。さまざまな臨床所見を基に臓器の形態異常を見出し、その組織学的構造を病理医が診断することにより、がんであることが確定する。症例によっては、さらにDNA解析が行われ、がんがどのような性格のものであるか、それに対してどんな治療方法が選択できるかなどのディスカッションがなされることになる。このディスカッションの場は、エキスパートパネルとよばれるが、この場で提供されるDNA解析情報の基礎となる「解析する腫瘍の場所」を決めるのは病理医である。ここで病理医が求められているのは、どれだけ解析に適した活きのよい腫瘍の部位を選別して解析にかけるかという判断である。

本書は、正常の肉眼所見、組織学的所見を学び、そこからさまざまな変化をきたす疾患について、肉眼的変化、組織学的変化を学んでいくスタイルで編纂してきた。今回の改訂でもそのスタンスを踏襲している。

肉眼、あるいは、ルーペ像で病変を同定し、観察することは、DNA解析が重要な時代になっても欠かせない基本的な能力と考えている。将来、どのような診療科に進むとしても目で見て「正常でない」ことに気づくことが診断の第一歩である。

形態的な所見とそれに基づいた病態は、解析技術が向上して新たな情報が加わり解釈が変わったにしても変わらないのである。

第3版では、執筆担当者の世代交代した部分があり、新しい担当者にはより新

しい写真で解説をいただいた。また、医師国家試験や共用試験を意識して画像を増やした項目もある。

本書の作成にあたり、病理部門では入手できない貴重な臨床画像を提供いただいた臨床各科の先生方には、感謝したい。

本書が、医学生、医系学生のみならず、研修医、専攻医、臨床医の皆さんが、診断学の背景にある臓器の病理学的変化を意識しながら学習、診療に臨むための一助になれば幸甚である。

2024年1月

執筆者を代表して
下 正宗
長嶋洋治

初版の序

疾患の診断を行う際に病理組織学的診断はその要になるものである。特に、本邦の死因の第一位である悪性新生物，すなわち，がんの診断においては必須のものである。

この診断業務を行っている病理医はこれまでは裏方の存在であった。しかし、病理診断科という標榜科として国民医療を支える一部門として認識されようとしてきている。また、必修化された医師臨床研修制度のなかでは、CPCレポートが必修項目となり、診療を行う医師のすべてが病理医の指導のもとで医師と成長する時間をもつことになった。

これまで、基礎医学と臨床医学の架け橋として病理学が語られてきたが、これからは臨床医学を支える病理学としての発展が期待される。病理診断学の発展である。

病理診断学の方法論で最も重要なことは病変の観察である。その中心は、肉眼的観察，組織学的観察である。病変により、電子顕微鏡の観察や免疫学的検査、染色体/遺伝子検査による細胞の解析が加わる。病理診断医のトレーニングは、肉眼的観察と組織学的観察を繰り返すことである。肉眼的観察には、臓器そのものを見ることだけでなく、さまざまな画像所見の把握も含まれる。病理診断学のことをよくわかっていない医学生などが、顕微鏡を見て診断するのが病理診断で組織さえ見れば診断がつけられると思っていることがしばしば見受けられる。しかし、どのような病変がどのような方法で採取され標本になったかは非常に重要な情報である。病理組織学的検査の申し込みの際には、なぜ病理組織学的診断が必要になったのか、きちんと画像所見も含めて詳細な臨床情報を提供する臨床医が増えることを願って本書は作成された。

羊土社から本書の企画が持ち込まれたとき、正常組織と病理組織との比較がメインの企画であったが、上記の思いから肉眼所見が豊富に加わったものとなった。実際の医療現場では、担当医は肉眼的に見えるものを病変として認識して、その組織学的診断な裏付けを病理診断医に求めているはずである。本書に掲載された写真は、画像診断を行う際や病理組織検査申込書を記載する際に大いに役立つはずである。

医療現場でのカンファランスでは、さまざまな専門家がそれぞれの専門とする

方法論で疾患を解析し正しい診断にたどり着き治療方法を検討していく。本書では病理診断学の立場から正常と考えられる組織像を提示した。正常組織との比較で病変を認識してもらえるように配慮した。病理組織学的診断のための材料はわれわれの手元にあったが、今回重視した肉眼所見用のさまざまな画像は関連した担当部署よりの提供を受けた。この場をお借りして感謝したい。

2008年1月

執筆者を代表して
下 正宗